親潮の接点に加え、利根川河口という世界的に有名な海域である。また小湊実験場は、全国的に類例のない禁漁区を有し、ともに生態系としての生物群集系と無機環境系の両サブシステムを、総合的・学術的に研究・考察可能な学術研究上きわめて貴重な施設であり、学内、学外の研究者に開放し、実質的な地域の共同利用施設として研究実績を上げてきた。

今後、さらに貴重な海洋生態系研究・教育の場として最大限に活用し、さらにそれらの諸研究を学術的に統括総合して、各種分野の研究の分担を通じて、海洋生態系の研究を深める実質的な地域の共同利用施設として充実し活性を深めるため、同施設を改組し、附属海洋生態系研究センターを設置するものである。

第６節　学内の動き

最初に学部組織の改組について記す。1979年４月１日、園芸学部園芸別科の改組が行われた。それまでは１年課程（定員25名）と２年課程（定員25名）を併設していたが、この年から１年課程を廃止し、２年間の一貫教育により教育の実効をあげることにしたのである。入学定員は40名であった。

1982年４月１日、工学部画像工学科が、画像工学科と画像応用工学科に分離改組された。画像工学研究の進歩に対応するためである。工学部では、さらに1989年４月１日、工業意匠学科、機械工学科、機械工学第二学科、電気工学科および電子工学科の５学科を、工業意匠学科、機械工学科、情報工学科および電気電子工学科の４大学科に改組し、かつ、大講座制を採用した。

1979年11月10日、千葉大学創立30周年記念式典が、教育学部視聴覚教室において挙行された。香月秀雄学長の式辞の後、井内慶次郎文部事務次官のあいさつ、向坊隆国立大学協会会長（東京大学総長）、沼田武千葉県副知事、相磯和嘉前千葉大学学長の祝辞を受け、つづいて千葉大学30年勤続者に感謝状の贈呈があった。永井道雄氏（元文部大臣）の「高等教育の展望」と題する記念講演の終了後に、祝賀会が開かれた。文部省関係者、千葉県選出国会議員、関東地方の国立大学学長、元千葉大学学長、本学関係者など出席者は約450名であった。

30周年記念事業の１つとして、1980年１月、『千葉大学三十年史』が刊行された。総論、部局編、資料編、年表の４部構成で、1,600ページの大部な書物である。香月学長は序文の中で、刊行の意義についてつぎのように記している。

千葉大学の歴史を30年史の過去にさかのぼってみることは、一人千葉大学のみならず、同時に発足した多くの新制大学の生々流転の歴史を振り返ることでもあり、そこに居て、そこを去っていった多くの人たちの遍歴と回帰の想いでもある。そして今30年の歴史の上に位置づけられた本学を、これからどのような考え方の上に熟成させてゆくかが、この大学に職を奉ずるもの、ここで学ぶ者、そしてこれを取り巻く多くの機構と、それを構成する人々の責務として、大きくのしかかっているのである。

この編纂の過程で、年史関係資料室が附属図書館内に設けられ、以後、各部局の資料が系統的に収集・管理されることになった。

『千葉大学三十年史』につづいて、1981年に『園芸学部七十年史』、『百年史　千葉大学教育学部』、1982年に『千葉大学工学部六十年史』、1985年に『千葉大学看護学部10年のあゆみ』、1989年に『千葉大学薬学部百年史』の刊行をみた。

1981年２月、附属図書館の増築工事が終了した。現在新館と呼ばれている建物である。内部の整備と移転作業の後、９月１日に全館開館となった。延べ面積は従来の２倍以上に増加し、当時としては国立大学有数の大規模図書館が完成したのである。10月31日、新館竣工式が図書館で挙行された。新館の塔屋には鐘が設置され、1982年３月、除幕式が行われた。この鐘の設置は30周年記念事業の１つであった。鐘のデザインは佐善明工学部教授、製作は三重県の中川鋳造所である。鐘の上部にはラテン語で“AD ALTIORA SEMPER UNIVERSITAS CHIBA”（常に一層高きものへ、千葉大学）と記され、下部には『千葉大学三十年史』の香月学長の序文の一節「焦らず、急がず、止まることなしに、千葉大学を大学たらしめる為の着実な歩みを／千葉大学三十周年記念／1981年11月　千葉大学長香月秀雄」が、帯状に刻み込まれている。また鐘の正面には本学のマーク、背面には、1949年本学創立に際し本学に包括された旧制の諸学校（千葉医科大学、同大学薬学専門部、千葉師範学校男子部、同女子部、千葉青年師範学校、東京工業専門学校、千葉高等園芸学校）の校章を配した。この鐘は「やよいの鐘」と名付けられた。

建物の建設をみておこう。1979年末、外国人教員などの宿泊施設であるゲストハウスの建設工事が完了し、使用を開始した。これも30周年記念事業の一環である。また、同年７月、学生部新庁舎、1980年春には共同研究センターの建物と第２体育館、1981年10月には教育学部５号館が完成し、同年11月には工学部新築工事が完了した。さらに、松戸地区に1981年１月、緑風会館（福利体育施設）が、西千葉地区には1982年、サークル会館（課外活動共用施設）、大学会館（福利施設）が、それぞれ建設さ

れた。本学における福利厚生施設充実の時期といえる。

1981年４月、千葉大学広報委員会規程が制定された。広報委員会は、これ以前から「千葉大学広報」の発行にあたっていたが、規程の制定後、1981年７月の『千葉大学廣報』を第１号として発行した。以後、通しナンバーを付して現在にいたっている。

同じく1981年４月、本学における行政サービスの改善および事務の一層の改善合理化につき具体的検討を進めるため、庶務部長を委員長とする事務改善委員会が発足した。前年にできた事務合理化委員会を改組したものである。

国際交流の面でも、いくつか動きがあった。1982年５月、本学はドイツ連邦共和国ゲオルグ・アウグスト大学ゲッチンゲンと姉妹大学協定を結び、1984年１月には、アメリカ合衆国アラバマ大学、1985年５月には中国湖南大学と、交流に関する協定に調印した。相互の研究教育の協力関係を促進するためである。

1983年９月５・６の両日、生物活性研究所主催で千葉市民会館において、10カ国（アメリカ合衆国、ドイツ連邦共和国、カナダ、オランダ、フランス、イギリス、インド、中華人民共和国、台湾、デンマーク）の21名の学者を含む、総勢250名からなる第１回生物活性国際シンポジウムが開催された。テーマは「菌糸状微生物―その感染、中毒症ならびに治療」である。これは文部省国際シンポジウム開催経費を受けて本学が主催した最初の国際シンポジウムであった。

こうした国際交流の活発化に対応した事務機構の整備として、本学では1983年４月、庶務部庶務課に国際交流係を設置し、さらに翌1984年４月には庶務部に国際主幹をおいた。千葉大学国際交流委員会は1984年５月、「千葉大学における国際交流のあり方」と題する意見書を学長に提出し、国際交流推進のため本学が努力すべき方向について見解を述べた。本学が「千葉大学外国人教員の任期に関する規程」を制定したのは、1984年１月である。この規程では、本学が任用する外国人教員の任期は３年とし、再任を妨げないと定めた。1987年12月には、外国人受託研修員等を含めた、外国人研究者等の受け入れ方法を明確にするため、「千葉大学外国人研究者受入規程」を制定した。これにともない「千葉大学外国人研究者規程」は廃止された。

市民やジャーナリズムの注目を集めた集会として、教育学部教員有志が中心になって組織した「教科書問題を考える会」が主催し、1981年９月19日、教育学部で開催された「教科書問題シンポジューム」がある。当時、自民党が中学校社会科教科書は愛国心に欠け偏向しているとの見解を発表し、教科書への国家統制強化の動きが活発になっていた。これに対し、この年５月に発足した「教科書問題を考える会」は、政治的圧力に抗し、あるべき教科書像を求めて研究会を重ねてきたが、さらに全学の教職

員、学生、一般市民に参加を呼びかけて、９月19日にシンポジウムを開催した。当日は伊東光晴法経学部教授が、「教科書問題の底流」と題して基調講演を行い、このあと同教授と宇野俊一文学部教授、元社会科教科書会社編集長村上和子氏、「考える会」世話人の谷川彰英教育学部助教授の４人でパネルディスカッションが行われた。多数の市民や学生が会場に集まり、参加者数は600名に達した。この内容は新聞で広く報道された。